

124・126・128・130 ハルミの部屋

時計の音だけが生きているような沈黙。

三すくみになっている村上、ハルミ、母。

そのあまりに重苦しい空気に堪えかねたように、ハルミ、

「刑事さん……いつまでそうやって、私たちを苦しめるつもり」

村上「苦しめているのは、君の方だよ」

ハルミ「違うわ、あの遊佐<sup>ゆさ</sup>って人、どんなことをしたか知らないけど、私にはなんにも悪い事はしなかったわ。時々、楽屋へ来て、悲しそうな眼で私を見ていただけよ。私、そんな人を自分の手で捕まえさせるような事は出来ないわ」

村上「じゃ、君は遊佐の居所は知っているけれど言えないって言うんだね」

ハルミ「そうかも知れないわ。あんた達が捕まえるのは勝手よ。でも私が捕まえさせるのはいや！」

と、いきなり押入れを開け、大きなダンボール箱を取り出す。

ハルミ「……さ、これを返すから、帰ってちょうだい」

箱のふたが外れて、目の覚めるような華やかなアフターヌーン・ドレスがパツとひろがる。

母「……お前……何時の間に、こんなものを……」

ハルミ「……あの人がくれたのよ……一人で歩いていた時、ショウ・ウインドで見たんだわ。私、こんな綺麗な洋服一ぺん着てみたいって言ったの。その時、あの人、とても悲しそうに私の顔を見てたわ……それから一週間ぐらいして、楽屋にこれを持ってきたわ……」

母「ハルミ……じゃ、お前……」

ハルミ「そうよ……あの人、私のために悪いことしたんだわ……でも、私だって勇気があったら、自分で盗んだかも知れない……ショウ・ウインドにこんなものをみせびらかしとくのが悪いのよ。私たち、こんなものか

うためだったら、盗むよりもっと悪い事しなけりや駄目なんだ！」

母 「ハルミ！」

ハルミ 「みんな、世の中が悪いんだわ。復員軍人のリュックを盗むような世の中が……」

村上 「それは遊佐が言ったんだね？」

ハルミ 「……そうよ」

村上 「しかし、復員の時、リュック盗まれたのは遊佐だけじゃない」

ハルミ 「……」

村上 「僕だって盗まれた！」

ハルミ 「！」

村上 「僕はこう思うんだ……世の中も悪い……しかし、何もかも世の中のせいにして悪い事をする奴はもっと悪い」

ハルミ 「だって、悪い奴は、大威張りでうまいものを食べて、綺麗な着物着てるわ……悪い事するものが勝ちよ」

村上 「本当に君はそう思うの？ じゃ何故、その通りにならないんだ？ この服だってきたらいいじゃないか」

ハルミ 「……」

村上 「さ、着たまえ」

ハルミ 「……」

村上 「何故着ないんだ！」

ハルミ、ギラギラと村上を睨んでいるが、パツと洋服を掴む。

× × ×

閃光……雷鳴。

× × ×

ドレスと着たハルミが眼をギラギラさせ、くるくると廻っている。

ハルミ 「楽しいわ！」

村上 「……」

ハルミ 「とても楽しいわ」

村上 「……」

ハルミ「まるで、夢みたい！」

真蒼な顔をして見ていた母が、

「馬鹿ッ！」

と、ハルミを平手打ちにする。

母 「馬鹿ッ馬鹿ッ馬鹿ッ！」

茫然と立ち尽くしているハルミ。

突然、顔を歪め、母に抱きついて泣き出す。

ザーッ!! 激しい雨が降り出す。

村上「……僕のピストルで二人も射たれたんです。しかも、

一人は殺されたんだ……僕ア……」

村上を見つめる、ハルミと母。

村上「それに今夜は、変に胸騒ぎがするんです。何か起こ

りそうな気が……」

閃光・雷鳴。